



里見八犬傳

第四輯

卷四



南總里見八犬傳第四輯卷之四

東都 曲亭主人編次



第三十七回

病客藥を辭しと齡を延ぶ
俠者身代殺して仁をばら



房八むらやちのくく笑わら介けいととちち笑わら物識ものしる人ひとの常つねめいめい積善とくぜんの家餘慶いえのあまらありあり金言きんごん宜定いさだふ
 故ゆゑあるありぬ大塚おほづか生なへ父祖ふそ三世さんせい忠信ちゆうしん孝義きやうぎ傳つた稀まれなるなるその縛くわの越こへ船中ふねちゆうゆてみづみづも
 りるををことこととと竊聞せうもんしとし詳しょう知ちりりととままががととわわととがが妻つまの不慮ふりよ命いのちをを隕おちししる
 鮮血せんけつとと自然しぜんとと彼人あいつの藥くすりよよまるまるも天てんの冥福めいふくが過失あやまちもかかくくとと聊いささ面おもてを起おこめ
 似にこれ夫婦ふうふの恩愛おんあい今更いまさらふふのの心こころののろろとと八千やせん萬言まんごんももるる足あしとと不覺ふかく時ときと
 殺ころさんさんよりよりととくく鮮血せんけつを取とりりとと刀やちめめく死し入り入りとも全體みづかみハハややとと冷ひやべべとと温ぬる熱あつの
 失うせるるいいふふとと絞しぼるととも血ちを獲えんんややととくくとといいををせせるる小丈こぶせ吾われこのこの誤ご後ごふふととかかり

南總里見八犬傳第四輯卷之四

局く小立のどきとも四下ゆき各器を何とぞとん久き念玉坊が送れる。
 彼被尾貝横より。行燈のほろもふあり。あを究竟の物めとむりあち
 往く左も取アそ。仆る女弟を引起せが苦と叫び声と共に鮮血の瓶と漬る。
 瘡口も貝を推著く。南無阿弥陀佛とこころこころと唱る向小韓紅貝乃
 半分は受さすける。小文吾のいごとく。弱る心を励しとお沼菴とことと平活
 と系より細く目をひく家兄。こを使わご存命て致す小懸りた誠心を
 説明さす。幾條を夢うとむかりうちゆさ小抱のん小も声を流さす力を
 紀さん小も動さすま。あろ小泣の。致ひの。疑ひ零と共侶小滅くゆく身を惜
 くで惜む名残へ今下とびいづく言葉をか嶋のよとの岸小渡りて瀬小
 ころ心地小休ゆたとのみ声のさ冬枯の朝の原の虫の音よりも哀果。今下
 の呼吸小小文吾の胸塞りく武心も度多泉流り涙を流し落し。原來お沼菴の

現ま事大さ小休より。致然と具土の迷ひの霽ん山林へ彼知ふと良人の
 ころ小推向と。房へうちとく。目をさすまをたか沼菴よ。多ひけもねくねひ
 刃へおん力の薄命。ご子の横死へ過世の業報勸解と今さうめまふよりね。
 ころあわさか夫婦の鮮血。世小ありく。死魚肉傑のその死を起さ茶劑とる。
 是れ。おま。功德のわづら。むらうを迷ひもま。正念とるま。乱しと。將大されく
 うち点頭。そのろぬとゆるう。多ひ堪ても堪る。死も口大八がうのそを亡
 骸まとも今下とび。んあま。とうち歎け。房八頭をうち掉く。そまも益
 ち。歎ま。ま。目。諄言。こと。女々。かりける面。ま。ま。この布を解
 袷。こ。血も取。と。や。大田殿。このふの。白の松。も。小結。び。け。
 布を解んと。程小喃。今霎時。吾侪。小も。告別。をと。外面。より。密音。立。之。禁
 る。是。戸。山。の。妙。真。之。閑。入。り。又。闔。る。戸。を。走。ま。ま。も。運。び。る。子。の。舞。足。乃

踏所ふみどころ。さふもあふあふ。房八ふさやちと沼ぬい。藩はんがほもふ身みを投なけり。哽むせかり泣な沈しづまら。
 且またくく目めを拭ぬぐひ喃なみ房八ふさやち豫よの歎なげ死しのやまま。かからぬ旅たびの伴とも侶り小こ息いきえ
 孫まごさ入い放はな遣やる。ここが力ちからひとをいいめり。羽はねままり又また誰たれを友とも推おをよよ。小こ慰なぐさめん子こを
 先まぞと幸さいち死しのめ。ああままとほる世よの例れいめも。ままり入いる人ひと悲かなし。よよ寝ねるままね
 宿やど小こ獨ひとり不ふ樂らくく。苦くるし死しの夜よを曉あけええり。切せめくああん力ちからの勇ゆうし最さい期きを者もの一
 者ものばややと。竊ひそ小こ宿しゆくを起おこせ又またああの檐のきさ下さ小こああままよよけけと。ととてもかかても存ぞん命めいぬ
 ここが子こと知しらるら迹あと逃にげげる。哭なき小こああままると叱なぐららん最さい期きの越こええ彼かのののままと
 るるの竊ひそ小こああままの逢あいい逢あいい返かえるると。ああままども足あしの進まるるがが用もちぬぬ戸と口くち小こああままを
 倚よけけりり音ねめめととここ縁えん夏なつ虫むしののひひより焦こええとと又また濡ぬるるとと檐のきの玉たま水みづここれれふふ
 雨あめと涙なみだの外ほかああままれれかかるるべべと知しるるふふかか沼ぬい藩はんを送おくりかか下くだりりせせ。大おほ八やちを
 ささ又また隸れいてていい来きささ。鴨鴨の羽はね搔かきき百ひゃく羽はね搔かききかか口くち説せどももああまま盡つぬぬここがが這この悔くわいととかか

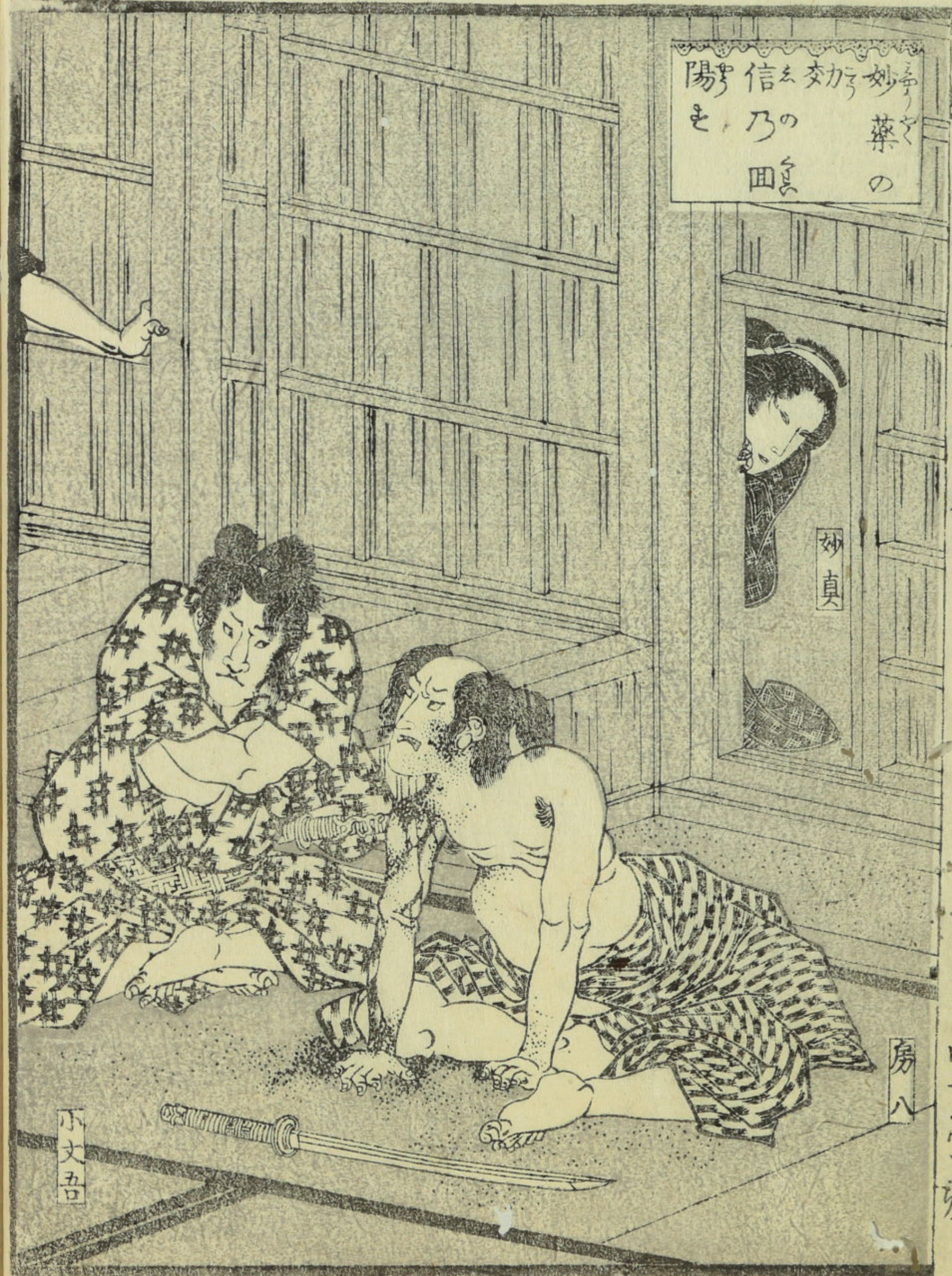
いいふふ。ああままとと大おほ田たぬぬ。ままままの憾うらみののううららんん後のちの歎なげ死しと今いま宵よと知しるる
 よよももああままとと歎なげ喃なみかか沼ぬい藩はん吾われ侑たすけけ豫よの事こと情じやうをを知しららるるああんん力ちから告つげげるる一ひと人にんかか
 つつとと恨うらみみをを惜おぼししやや利と鎌か小こ嬬じゆ草そうの霜しも小こ先まづづ幸さいちちああままもも大おほ八やちかか
 最さい期きハ特とく小こ送そう憾うらみ。やや孺によ児こよよ。祖む母ぼああままををおおいいららるる。とと亡な骸がをを抱かかりりととままりり
 揺ゆ動どうくく又また哽むせええるる千ち行ぎやうの涙なみだハ岩いわ走はるる瀧たきののとと甘あまめめくく。碎くだるる白しろ月つきの苦くるしし死しかか
 かかももああままとと歎なげ死しせせりり。沼ぬい藩はんハ有あ繫けるる姑こ嬢じやうのの声こゑハハ使あけけたた哀あ傷やうとと深あ瘻ろう小こ息いきをを
 吻くちむむきき。房ふさ八やちもも共とも侶り小こ弱じやくるる心こゝろをを励あまますす。母ははれれよよ。ここののままりり歎なげ死しとと病びやうじじづづひひ
 ああままとと父ちちの送そう訓くんをを果はええとと身みをを殺ころせせるる母ははれれ孝こちちををむむ子こ小こ又また不ふ慈じの行ぎやう心こゝろ
 ああままとと一ひと人にんハ是こゝれれ。兩ふた人にんハ非あらままとと孝こ道だう定じやう小こ難なん多た便べんりりままるる死し母ははのの頼たのむむ
 阿あ舅きやく大おほ田たぬぬ日ひはは熱あつ小こ頭あたま身みの息いきああるる程ほどをを苦くる惱なごししけけととここの布ぬいをを解とけててとと
 いいととままりり小こ文ぶん吾われハハ慰なぐさめめるる。嘆なげ息いき。日ひはは誤あやままるる妹いもうと夫むとをを敷敷きき又また誤あやままるる妹いもうとをを

良人の歎ききり。父といふも誰を恨ん大家の歎死ハ理りるも今更
 千萬口説も要らず。後世のいふも肝要あらんと諫く軀て房八がほろ近く
 刃をよそく。布引解バ漬る。鮮血を受る。法螺の貝吹く。無常の風をまき。
 死天の山伏日登。岩廻む鷲の峯入小夫婦身を掖。子を負て往方ハ
 十萬億佛土蓮の臺法の雲踏ま迷ひそと薦めたる。母をさぶく唱名乃
 声も涙小口隠り。さる程小犬塚信乃の曩小文吾と房八がうち合し。さ
 大刀音の子舎へゆえ。事しと安らぬ。月を鎮め苦痛を忍びて。
 身を起えんとあつても。腰の立竹杖。刃を合く杖小。身を坐行し。
 息を吻死幾間もあぬ。家の内を虫の跂み如く。出居と前房の間ある。
 障子のほろ小。房八のや疾を負ふて。その赤心を諦し。彼條の
 物より。その妻その子の横死の。さす。病苦も外小。且敬馬き

且悼き。感涙を禁。吏を人をも。僅小障子一隔めど。その如く
 上。痛頻小。其知は俯く。又小文吾ハ
 信乃が為小房八夫婦の鮮血を見小盛る。及ぶ。信乃を慨然として。其
 頭を擗。生を奴。死を憎む。則天の心。君子の庖厨を遠ざくる
 と。命終るとも。いそぐ。美士郎婦の血を。茶削小せ。房
 類を古今小。得。こが。羽六保。けん息の内小。對面。志を告。や
 と。辛く坐行。進。近。障子の腰小。掛。も。用。る。る。の。力。さ
 ち。果。身。の。衰。微。を。い。と。朽。を。く。ひ。多。當。下。小。文。吾。ハ。鮮。血。を。見。小。受。小。バ。
 房。八。ハ。と。く。奥。へ。と。頤。を。く。頻。小。進。る。小。小。文。吾。猜。し。と。ち。点。頭。甲。夜。より。異。さ。る
 事。小。紛。し。と。下。も。彼。人。の。病。を。訪。し。暇。あ。ら。ず。今。さ。も。心。の。折。か。く。ま。り。小

調ひ。良薬を空せん。さへとくまづ身を起ら。溢るまづ血を盛ら。
 梭尾貝を右より持て。子舎へも遠く。障子を沙羅と引開く。進めえ。
 と程ふ多る。信乃は足踏みる。跌懸く持てる貝を忽地破ら。落せ。
 信乃の肩より脛腓まぐ。透間もろく血を沃ら。衣羅も肌膚も徹く。
 彼瘡口は流入りえ。苦と叫び。仰反り。小文吾のよ。驚遽て。こんま。
 是信乃ちりけり。そもいらの程より。狄大塚のあ。小ま。りけん。不思議。獲
 たる良薬をうち落せ。て。惜ま。て。や。せん。後悔。み。
 たり。よ。も。ろ。項と腋へ。成かけ。起せ。も。ろ。氣息。声。あり。立て。呼。活。
 尚念玉が。覺の。や。せん。と。多。く。奥。小。憚。あり。いつ。ふ。と。と。氣。を。胸。く。ち。ん。ま。
 ざる。小。敷。る。め。ぞ。妙。真。も。この。為。体。を。外。の。見。ん。は。さ。げ。め。く。行。燈。の。灯。口。推。向。て。
 いつ。ふ。く。と。向。の。程。小。信。乃。の。睡。の。覺。る。が。如。く。身。を。戦。く。目。を。開。け。吻。と。自。心。く。

起き。面。色。忽。地。回。陽。く。枯。る。枝。小。花。さ。く。如。く。腫。色。つ。れ。金。瘡。の。瞬。間。小。
 結。痴。く。邪。熱。袪。れ。身。へ。軽。く。元。氣。平。日。の。い。や。ま。く。心。地。清。々。と。く。る。ま。ふ。り。
 小。文。吾。の。この。光。景。は。再。び。呆。れ。り。欬。び。り。行。て。く。ち。被。一。藥。血。の。効。あり。け。り。
 と。て。め。く。曉。す。く。面。を。起。し。扱。云。と。と。ろ。ふ。ん。妙。真。も。亦。か。子。夫。婦。の。あ。い。
 い。と。本。意。あ。ら。を。稱。多。當。下。信。乃。の。形。を。儼。く。小。文。吾。ふ。ち。對。ひ。裏。小。大。
 刀。音。の。ゆ。の。え。り。より。いと。心。の。と。ろ。ふ。苦。痛。を。刃。び。身。を。坐。行。く。と。さ。つ。ま。で。ま。
 さら。れ。彼。夫。婦。の。血。を。り。く。破。傷。風。小。汰。ん。ハ。刃。心。び。ぐ。ん。行。ち。ま。推。辞。や。
 と。の。小。筋。小。跌。ま。の。失。少。く。ち。被。ら。ま。鮮。血。の。効。軟。病。痾。立。地。小。本。復。し。り。
 今。更。辞。さ。ら。ふ。由。あり。と。そ。の。恩。を。謝。し。義。を。感。じ。且。妙。真。を。慰。め。く。共。侶。小。
 房。が。ほ。ろ。い。の。れ。く。對。面。し。姓。名。を。告。ぐ。そ。の。義。勇。を。答。恩。德。を。銘。め。く。そ。の。



せ。彼修驗者念玉の渠別室を。甲夜過る比は尺八を吹遊る。その
 後の音もせむ渠熟睡し一毫も緯の中を知らず許さん今の世の人心笑乃
 中刃を隠せばこそ只彼がるの成の。のふくとどひつ四目八臂のあはれど
 その寤るや寐るや。見ざる暇あざりぬまづその臥房を窺ふの訝しむ
 あらむ禍の根をぬん事ハ洩易くと成る。なか後を防ぐ心盡し仇
 るのうんと耳死告身と起せば信乃ハ仰ぐうち點頭のり趣今さふ
 のひ合まるよそわ某子合小在りと別室のく軟とおぼく密壇ふ声
 ちる。口そのるぬるをも嚮ぬ某彼知る。障子のあはれ在りと死なばく
 簀子の閑む音せる。んえんと欲せぬ病苦甚し折る進退よ後の
 たる小仕せむ且暗き人軟猫軟或ハ鹿の野為る。軟定くゆゆとあはれ
 倘その修驗者るばや。といふ小文吾うち驚馬る。その念玉疑ひす。且密

談の聲せむ謀ありあせりのあはれく竊め背門より牙つるまゝこの條乃る
 たる洩れ。密訴せむと脱れ。由大敵にまゝ。鈍や大事を畏ぬと慚
 愧後悔措りも。腋刀の鞘釘走せと舌潤る。怒對の面色進むと妙莫
 推禁めその人同類あはれ敵のま少ハ揣ま。漫ふを女里あはれとををつ
 且房ハの氣を問わけ。今般の苦痛只とくとのをせむを信乃も俱小と遠く
 刀を令く身を起。小文吾小引る。齊一別小室へ赴んと。程小出居。前
 やあひの障子のあはれ小入り。おひみする声をあり立中を出入。且等安房
 國守里見治部大輔義實朝臣創業の功臣あり。金碗八郎孝吉が獨子。金碗
 大輔孝徳法師、大坊同藩の士故伏姫君の傳あり。蛭崎十郎照武家男
 蛭崎十郎照文ホナの小あはれ。今對面く疑念を釋ん且く等と呼り。障
 子を規と推ひれ並拉る。近づくをこえ且見別人をも。大先達念玉の幾年

旅小宴とて黒漆の麻の法衣を腰短小褙端折りと白枳の脚絆を穿頭陀衣と
背より左の小細代の笠を合ひ右の小錫杖を突立て徐々と後を歩上坐のそ
著つりける。是れ是れ又修験道觀得ハ髻髪を髻結しく段々筋の
麻衣小精好の野袴の段子の下縁取つて或腰叩の著る。朱鞘の西刀を跨
白木の小四方の書札四五通乗つて或茶く捧持つて大が次の席小著ぬわ
登崎照文とて。多ひひるるるる誰ふあをを怪ざる其の吉凶を料
る。初め心せさるる當下、大も席上をつとくところ人々あつた詔
をそ初め實をりて汝達告ごりて。あやうわとこれの年未故ありと仁義
礼智忠信孝悌の八个の文字。おのづから見せし。八顆の玉を索人為小六十餘圓を
行脚をせども一個の玉ども見せし。今茲五月の初より。杖を鎌倉小曳く
程小昔歳竹馬の友あり。登崎十一郎照文が君命成直宗なり。賢良武勇の

浪人を志のびく小暮るる。関東の國々を潜行く小環會ぬ折々との行徳小三
の力士あり。そ一人の醫小黒大なる志あり。牡丹のたは似るる。の風潮灰小ゆえ
う。その志牡丹似ると。多ひあはさるうわと。そが聲力をも試さく。又その志を
見むると。竊小十一郎と示合。こは鎌倉の修験者念正と假名を告り。
彼も亦鎌倉の修験者觀得と假名を告く。途より従者を備ふ。衣賞も行
李も似つる。山伏小拵立。共侶との浦小まの。先達職得分の季松小假拵。
ゆる日八幡の社頭。大田と山林が相撲の勝負を試し。小技も力もあつ。優
さ。但房八小文吾小藝術聊亞る。その折果。大田が志を眼前小見
と。捨る。かひあを。さる。智恵る。是則牛馬小
等。兎勇め。殘忍る。是則虎狼小等。縦大田山林小人小拵。一力藝あり
とも。心術平。薦る。足る。行状を。究て。後。と。深

念入遊山既水假托十一郎共侶留留今宵及及びかきまの甲夜の
間ふと濱里よりむすまき呼門も心ほものありて背門より入らんとき
慢立遠々生垣の間より不圖うち抜けばわが親子の舎小犬塚大飼等と團
坐す彼玉のる癒のり。又彼額藏の莊助さるまの噂せしをゆとりする小竊作の
又胸窺つ年来の宿望成就の時到来るこが飲びの餓鬼ゆく。地蔵の宝珠を
えふ勝とつ。さかはその宵のふ宿とま背門の庭より取らぬ十一郎が旅
宿よいぬとく竊ぬ云云のよを告謀わりて今宵又また宿りと鶏が鳴く東ふ
廣死國々も類稀る房へか孝順義死の事の趣大田親子が良吉信義及
犬塚が賢み薄命ある又大飼へ友の為志婆浦ふ赴けり。ゆそなくその憂
苦艱難竊ぬんりゆりて。且感且悼るこが袖さみ濡らるるが浮世の笠
中の其知小在る身も有繫めてゆくこが人の人説諦に死時宜のさるまじ

あゆその中成り果んときかまふ時を程ら今いかりとありて行旅を披れて
姿を更め旅より旅小宴して。且其行脚の老僧さるるを人々示し且房入木
その妻その子の臨終正念幽魂解脱の導師ともなるまやとく二十年のまり埋
木の花さるるの昔衣舊の次安ふりてこれ昔の憂ぬゆぐ捨果一世よ
まま漆の袖りく挿ふ餘りある。四個の義士未が不幸薄命或は一慈父一賢母
或は貞婦と小児の枉死ありてむろ薄命を歎きこが刃の敷らるる南無河弥
陀佛と唱るその既略をぞ説示を當下登崎照丈の扇を膝に推立て諸賢
者信のるや不口やこが主君里見殿の文を右ふ。武を左に當時無双の良将あり
この故ゆ仁義小わらぶが動え多む礼智よわらぶが紀のるも忠信ゆわらぶが
用ひのるも孝悌よわらぶが賞し多むも。あつ且とも安房上総の南嶋の盡ありて
賢を招くも普くもよやく其主君の密誑を。王封疆をゆく英士を暮め

且二十有二年。絶て信實をばさる。孝徳入道。二坊が存亡を妨んぬ。今茲
東へ八個團を編歴す。もも鎌倉まゝ法師と再会の事の起目。今、大のつれ
如。されが、大と某と姿を交す。この地、小の陽、入不快のて、形、直に陰も
水魚の如く、影の形、小後、如し。さうゆり、某、甲夜、小背、門下、潜より、俱、別室、小
をり、大が、笛を吹くと、た、小、直、立、出、く、おの、く、の、為、体、を、窺、ひ、つ、れ、退、け、大、法師、が
立、ま、り、て、窺、ひ、つ、緯、お、ち、も、ち、聞、見、し、感、涙、ほ、ろ、く、袖、を、濡、せ、り、大、塚、大、飼、犬
田、本、の、既、小、口、が、主、家、小、宿、縁、あ、り、山、林、の、さ、る、さ、る、と、亦、得、さ、れ、の、豪、傑、あり。
直、ま、し、も、め、も、相、謀、め、く、大、塚、が、今、宵、小、通、る、窮、死、を、救、ふ、べ、し、早、す、て、命、代
ら、ん、と、せ、ら、し、丁、の、邊、憾、し、こ、が、主、君、里、見、殿、の、お、ん、父、季、基、朝、臣、共、侶、小、結、城、龍、城、の
折、忠、戦、の、義、小、より、く、成、氏、朝、臣、の、御、方、直、ま、し、も、近、比、の、詩、我、の、執、權、横、堀、史
在、村、が、奸、佞、非、法、の、ゆ、え、あ、ま、り、お、の、づ、く、小、疎、遠、ゆ、く、交、も、し、め、の、如、く、さ、る、す、。

大塚難及。及、つ、こ、直、亦、一、臂、の、力、を、勤、し、く、追、ひ、の、兵、を、殺、ち、く、相、伴、ふ、ま
本、國、へ、還、ら、ん、と、し、て、お、も、ろ、く、人、心、安、ら、ず、と、叮、嚀、小、慰、め、く、才、意、を、詳、め、出、さ、ふ、ら、ん
會、駭、然、と、く、く、ら、敬、篤、れ、お、の、感、め、く、覚、果、ぬ、夢、小、夢、こ、る、心、地、せ、り、さ、が、中、信、乃
小、丈、五、尺、共、侶、小、膝、を、進、め、く、大、照、丈、お、ま、ら、對、ひ、お、ひ、ろ、く、と、西、君、の、本、名、来、由、を
示、さ、し、く、疑、ひ、忽、地、氷、解、せ、り、さ、う、ま、し、も、道、徳、の、又、何、お、の、故、小、仁、義、礼、智、云、云、の
八、個、の、文、字、見、ま、し、八、個、の、玉、を、索、め、り、又、何、お、の、故、あ、り、と、身、の、痣、牡丹、小、似、る、め、を、
竊、小、愛、顧、せ、り、ま、し、て、中、ら、ん、ら、ろ、ろ、の、び、び、と、辞、齊、一、尋、れ、が、大、の、さ、び、く、ら、点、隙、を、
お、の、り、つ、り、理、り、ん、と、ま、が、縁、故、を、告、ん、その、野、以、ハ、如、此、と、彼、八、房、の、犬、の、の、伏、姫、を、始
終、の、の、役、行、者、の、示、現、感、心、并、小、白、玉、の、数、珠、の、る、こ、が、小、出、家、行、脚、と、二十、二、个、年、
歴、し、ら、る、の、九、事、の、顛、末、と、安、西、景、連、が、滅、亡、の、條、上、り、伏、姫、自、殺、の、條、ま、で、辞、短、く
解、示、し、ら、る、の、の、ち、伏、姫、の、賢、み、と、心、操、の、考、ゆ、く、慈、悲、あ、る、才

顔無双の未通女ありたの故小八房の犬小伴とて。官山の奥入り多しうど。
 絶く丸方を汚さるるま。法華経讀誦の功德ありと。彼犬さへ成佛せり。
 ころども因果脱れさけまゆや。必るどもその氣成感と。懐胎六個月及び
 多し。羞く自殺をみ折その瘡口より一道の白氣忽然と立沖と。彼感得の
 数珠のち共の中天小日光乱と仁義八行の文字見まはる。その八個の巨玉八方へ
 飛行し失く残る地小階より。口と諺と鳥銃りく。件の犬を殺し刺姫小傷
 けこれども君公の仁慈ある。當坐小自殺を禁多のく。母親某が駭き前捨け出
 家を許し多し。ふのそ失う八個の玉の往方を索て又舊の数珠小懸る。奴ら
 と誓ふと故郷を立去り。あはるる小汝達現八本又彼大川莊助も感徳の玉ありと
 る。その玉小見まはる。文字ハハハハの数珠と符合と。且彼八房てふ犬と。その毛
 白と黒は茂雜へ。黒は牡丹の花小似る。その数八個の斑毛ありけまは八個の

花房といふ義をり。八房と名つけり。あはるる小汝達莊助ホまで四個ハ俱小
 身中る。その痣牡丹小似る小あはる。かれば是汝達ハかのく父わり母あれども
 その前身ハ伏姫の胎内より。顯と走り。白氣の生まるめり。欽その因を推しと
 果をりハ皆伏姫のち子ゆと。義實朝臣の外孫とて。且あはるるの氏之戎ハ
 大塚戎ハ大川戎ハ大飼戎ハ大田と皆犬をり。稱する。是不可思議の因縁
 あり。かまは汝達四人の外小又四個の犬士あり。その相似る玉と痣を具足と
 らるる疑ひる。今その人をほむといふも。竟小全く聚る。あはるる。宿願稍
 時到了く。あはる半を果し。疑く。まはる。と。説諭と。伏姫の
 像見る。數珠を取て。示る。信乃小文吾ハ豁然と玉の来由と感悟し。
 遠く彼數珠を受つ。つと。と。玉をみる。現。他四人が。呼藏の玉と一毫も
 異なる。只。顯と。文字あり。數珠ハ百。あはる。數と。あはる。八個の巨玉あり

けり。原來吾々が所持ありてみるこの數珠の巨王ありとて之ももる。この事と
まてせき まてせき
 ころ過世怪しく西犬士と俱み妙真も感嘆しく伴の數珠をりし時幸あり。
 とまれ。夫婦が耳も入りてその房ハ苦しめし。息も眼を睜り。よふ
まてせき
 後まがくと欲る。噫憾へ憾へ。只管嗟嘆をせり。大ハ其を憐る。
 そのほどもふ立ある。やをは房ハその憾を汝犬士小のむ。その義
あられ
 烈ハ犬士と共。後の口碑ハ何とぞんや。且ハ則汝が祖父安房の杣木の朴平が
あられ
 武藝の師あり主あり。金碗八郎が獨子ハ八郎大入の自殺のる。定包と討滅せし。
あられ
 功成名遂と。栄利を願ひて死し。いよく亡ざる。是忠臣のあらし。をせし。彼
あられ
 朴平が失と。尤も父の憾る所誰うの事をよとけん。唯この順孫房ハありと。祖父の
あられ
 悪名を雪る。小足のよ。今汝が為小朴平が疎忽の罪を亡父はやく。宥る

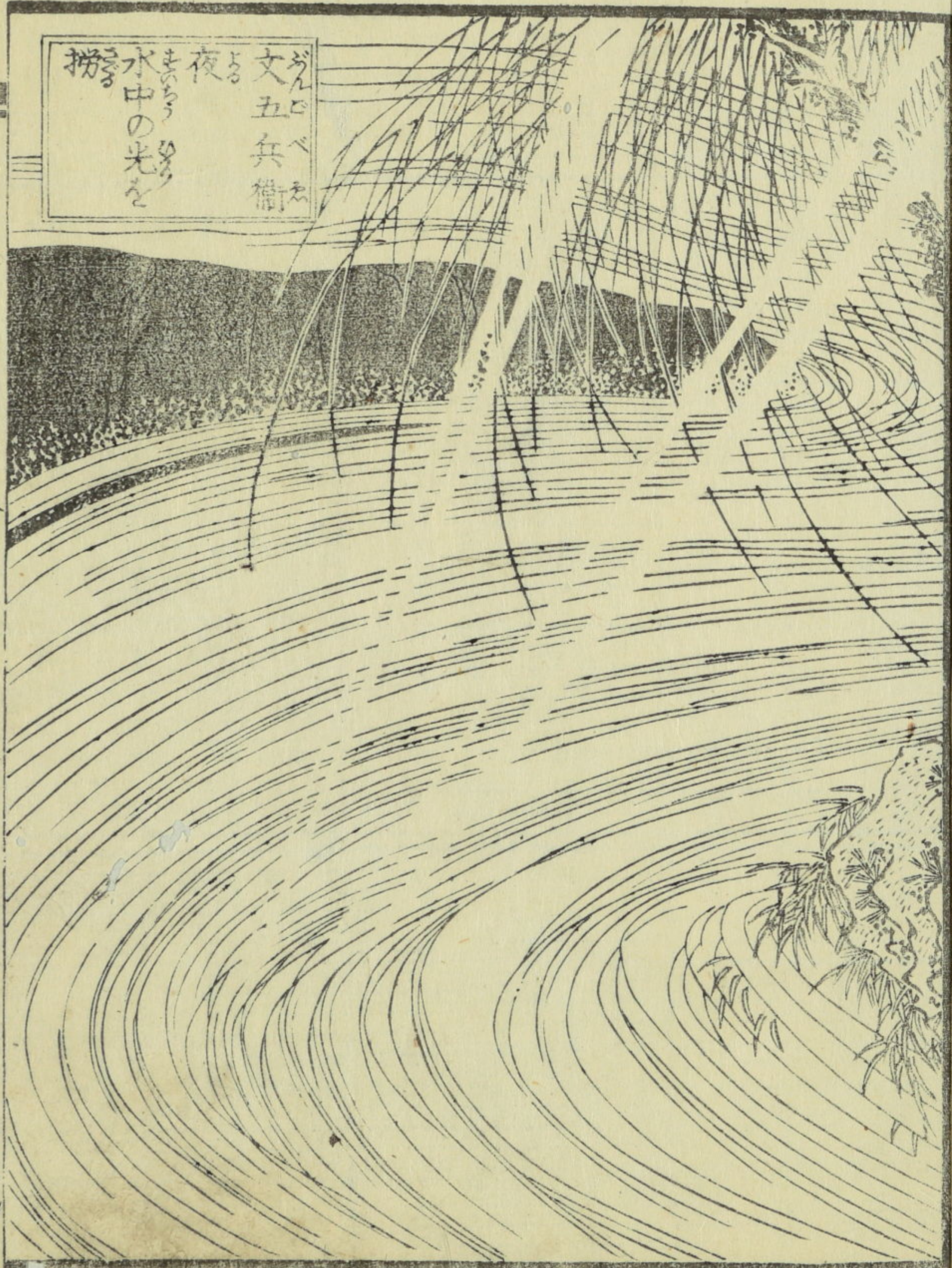
のあり。其れ我眞府の畏めく。清果を浴よと諭し。辞をちて。小房ハ信と
あられ
 向上の左のを托し。頻々大をうち拜む。妙真ハ又嘆かりて哭み
あられ
 けり。且、大法師ハ妙真がほり小卧させし。大ハ亡骸とて見か。う。嘆
あられ
 息。この小兒憐むべ。死し時を歴。其れも。その血色変る。さ。生る
あられ
 如く。故。亦奇とて。小膝を突く。何を死骸を抱か。けり。
あられ
 そのまの膝。左ののす口を楚と食。大ハ念地
あられ
 甦生。曰と哭。頻々。握語。左の眷。初。撥た。けり。小
あられ
 堂の。小玉。信。乃。小文吾。木が王。と異る。仁の字。見。加。旗
あられ
 大ハ。腋。肚。小。瘕。い。で。ま。単。衣。の。腋。散。し。黒。か。ふ。小。ん。え。ら。が。形。牡。丹。の。花。小。似
あられ
 父。房。ハ。蹴。ら。し。と。れ。の。瘕。い。で。来。し。を。人。ま。が。て。ま。が。と。と。さ。る。を。け。り。
あられ
 凡この席。小。あ。と。の。め。か。る。奇。特。小。敬。馬。嘯。と。送。り。復。と。歡。ひ。の。声。ハ。早。翹。小

雨あがり。枯ら稿ゆ八束穂をのつるふもる勝るぞ。その中妙真の勢ひあまの
 涙を拭く。小文吾と共侶小又も肩ホを慰め。耳の辺は声立。房八よ。やよ
 お沼井蘭よ大八を甦生。如此の奇特あり。こゝろん多と稚児を引よきんせ。
 玉と見せ。やよ喃と叫び。房八かうゆ。点頭。原来。子に宿世あり。渠を
 坐艸の上より。左の巻を撥け。狂弱者と。賤しめ。大八の渾名を。負せ
 らと。もか。小親。勝る。渠その玉。あを。恋あれ。大士と推う。の
 か。死。を。冥土の。餘別。小受。親。果報。母も。その。わ。あ。め。通
 子。を。産。ゆ。え。と。誉。え。と。沼。蘭。の。目。を。む。せ。ぬ。あ。る。教。わ。と。む。る。未。期。の。句
 果敢。も。玉。の。緒。終。小。絶。より。喃。いと。惜。わ。と。妙。真。も。む。り。死。骸。よ。み。か。け。と。
 叫。せ。ぶ。も。逝。より。ぬ。入。の。数。入。る。親。う。あ。ら。大。八。の。母。泣。乳。汁。賜。て。と。
 携。る。を。軀。く。小。文。吾。の。そ。の。せ。ぬ。め。と。後。よ。抱。れ。留。め。て。も。め。ぬ。涙。の。お。れ。

哀別離苦顔を背け。法然。と。當。下。戸。山。の。妙。真。の。頭。を。擡。浮。う。ち。か。と。く。大
 等。ゆ。う。ち。對。ひ。孫。大。八。が。生。れ。る。ふ。九。の。巻。を。撥。き。う。胎。内。よ。ま。か。の。玉。を。握。り。と。る
 故。ゆ。え。彼。伏。姫。う。と。中。ん。の。菩。提。を。吊。せ。ぬ。あ。る。道。徳。の。お。ん。じ。觸。ま。と。う。ち
 ひ。り。幾。く。べ。た。為。る。と。曉。て。も。る。母。怪。く。信。を。就。く。この。孫。を。大。八。と。呼。ぶ。人。乃
 負。せ。渾。名。め。く。片。輪。車。と。い。ふ。進。え。實。の。真。平。と。名。け。け。り。房。八。が。親。の。字。と。真。兵。衛。と
 江。屋。と。呼。ぶ。今。さ。う。思。へ。の。且。も。亦。大。と。い。ふ。字。を。冠。せ。し。も。不。思。義。の。因。縁
 あり。願。う。今。も。孫。の。名。を。大。江。真。平。と。呼。ぶ。ひ。く。物。の。数。め。足。と。む。と。大。士。の
 後。小。居。り。の。多。今。目。を。閉。る。親。へ。孝。養。す。の。且。不。た。後。と。信。ず。と。涙。あ。ら。ふ。か。れ。口
 説。べ。大。八。の。名。を。亮。介。と。う。ち。笑。言。哉。と。祖。母。の。情。願。は。家。歸。も。主。と。識。る。大。江
 あり。亦。奇。且。その。親。房。八。身。を。殺。し。仁。を。あ。り。と。め。子。に。仁。の。字。の。見。れ。る。

玉をぬき。仁に五常の最なるの。運天の心ゆ。賢者も。居ると難。今真実の
 親の代り。大士の隊の。入る。あ。れ。が。その。真の。字。を。あ。と。積。む。親の。字。の。字。更。へ。江
 親兵衛仁と名告ぐ。その子ゆ。親を。房へ。再生。と。大士の隊。入。る。小等。
 且房の二字を。轉倒せ。且。則。八房。入。沼。菡。を。轉倒。せ。且。い。ぬ。え。妙。真。が。俗。名。あり。
 戸山と富山と。和訓。ある。俱。名。詮。自。性。ゆ。八房。の。大。富。山。因。り。又。妙。真。の。真。俗
 二諦。一念。三千。の。妙。旨。ゆ。り。この。夫。の。子。の。婦。と。俱。小。清。果。を。得。る。の。義。を。ん。の
 禍の胎を推せ。房八が。祖父。あり。朴平。が。失。み。光。弘。ぬ。を。犯。せ。壁。妻。玉。梓
 時をぬき。逆臣。定。包。を。佐。け。主。家。を。横。領。せ。小。起。り。又。福。の。基。を。推。せ。朴。平。が
 獨子。あり。大江。屋。真。兵。衛。の。性。直。え。か。この。子。孫。の。為。小。舊。怨。を。釋。ん。と。欲。し。
 慈。善。の。誓。願。を。發。せ。も。果。さ。ば。その。子。房。八。送。命。を。守。身。を。殺。し。仁。を。る。を。
 則。二。世。の。功。徳。小。生。ま。り。因。果。の。脱。と。鳥。の。林。小。集。る。如。く。虫。の。草。小。聚。る。が

如。一。只。悟。り。死。の。か。ま。り。その。死。を。歎。く。へ。ま。口。の。生。を。樂。む。と。さ。ら。あ。ら。わ。り。
 と。解。示。せ。六。會。稍。玄。明。の。醉。さ。て。存。一。阿。と。感。得。る。當。下。小。文。吾。膝。を。進。め。大。木。は
 い。ち。道。徳。の。教。化。の。も。か。り。就。又。一。條。の。奇。談。あり。外。姪。大。の。親。兵。衛。が。玉。を
 握。り。生。ま。り。今。さ。う。ひ。合。ま。り。其。終。角。あり。時。二。親。の。夜。話。小。往。時。寛。正
 三年。の。比。り。よ。この。入。江。河。の。水。中。の。夜。あ。く。光。明。を。放。つ。と。あ。ま。り。人。を。怪。し。む。も。
 怕。ま。り。水。底。を。撈。る。ゆ。り。日。父。文。五。兵。衛。の。年。來。漁。獵。を。嗜。む。り。一。夕。網。を。携。て
 入。江。河。原。小。赴。り。件。の。光。明。を。心。を。ふ。ま。づ。く。網。を。あ。ら。ひ。の。う。ち。物。小。羅。ち。ね。り。
 其。知。小。望。を。失。く。その。曉。く。宿。呀。よ。か。り。次。の。日。網。を。乾。さん。と。引。揚。ぐ。擔。掛。る
 と。網。の中。の。物。あ。ら。り。漏。落。と。あ。ら。り。鈴。と。音。し。め。け。る。その。年。沼。菡。の。二。才。え
 親。の。網。を。乾。さん。と。その。ほ。ろ。も。小。這。上。り。彼。落。と。り。死。物。を。撮。り。口。小。入。り
 一。父。を。吐。嗟。と。驚。た。て。その。口。中。指。を。さ。り。位。と。も。厭。り。探。り。く。も。吞。下。り



文五兵衛
 夜の
 まる
 水中の光を
 撈る



文五兵衛

天守四輝巻四
 文五兵衛
 山崎堂藏

たるものや。竟ふ及ぶ。止み。い。る。物。を。吞。り。ま。ん。と。入。り。安。ま。ら。ん。と。や。
 日。数。経。る。體。小。沼。菖。の。恙。も。あ。ら。ず。か。か。中。を。く。ふ。安。堵。し。と。彼。水。中。の。先。物。名。劔。も。
 や。と。め。ひ。み。夜。を。犯。し。網。せ。り。か。も。底。少。藻。屑。も。あ。ら。ず。ゆ。の。後。入。江。河。小。光。明。を。
 放。さ。り。た。と。昔。語。小。せ。れ。り。の。わ。と。顧。小。女。弟。が。の。け。り。た。時。網。を。落。る。を。拾。ひ。り。
 吞。ら。れ。彼。玉。を。吞。り。し。か。く。彼。玉。の。腹。中。の。あ。ら。と。十。五。年。沼。菖。が。十。六。歳。の。春。
 房。八。房。歸。ぐ。小。及。び。ぐ。い。く。程。も。有。身。の。その。年。の。冬。生。と。る。赤。子。の。左。の。掌。の。その。
 玉。を。握。と。も。時。到。り。た。い。ま。と。機。り。も。今。又。ま。の。四。年。小。及。び。ぐ。件。の。玉。見。と。ゆ。れ。亦。
 是。不。思。議。の。る。ま。や。と。告。る。人。ま。の。耳。を。澄。し。め。い。よ。く。感。嘆。を。う。け。る。
 戸。外。を。成。す。一。犬。間。者。を。拉。ぐ。
 徵。書。を。返。し。て。四。彦。来。使。小。辞。を。

第三十八回

戸外を成す一犬間者を拉ぐ 徵書を返して四彦来使小辞を

時。家。小。を。畜。る。犬。の。る。昨。夕。あ。り。親。子。小。告。り。た。折。小。外。は。立。ま。ひ。道。
 徳。小。も。實。と。い。ふ。人。彼。巨。犬。を。與。四。郎。と。名。つ。け。し。其。全。身。黒。白。八。个。の。斑。毛。あり。と。
 その。足。の。み。る。白。り。因。り。四。白。と。い。ふ。を。訛。り。與。四。郎。と。呼。ぶ。後。小。の。犬。の。斃。れ。
 一。時。庭。小。埋。り。け。る。次。の。年。の。春。その。や。を。多。梅。小。最。も。異。ち。子。を。せ。ま。く。一。葉。小。八。
 子。薔。麗。と。世。小。の。八。房。の。梅。是。且。其。の。梅。子。小。仁。義。ま。ま。の。八。行。の。文。字。見。れ。と。鮮。小。を。
 讀。れ。る。日。を。経。て。文。字。の。消。失。と。い。ふ。も。其。の。枝。に。今。も。あり。彼。與。四。郎。が。母。の。感。得。を。つ。
 玉。を。吞。ぬ。と。知。る。と。年。を。歴。て。玉。を。犬。の。瘡。に。よ。り。忽。然。と。頭。出。り。某。が。小。入。り。梅。
 の。異。名。を。木。母。と。い。ふ。木。母。ハ。則。母。の。木。今。こ。の。見。と。同。が。玉。の。か。の。く。母。よ。を。い。て。ま。れ。り。且。
 彼。梅。子。の。八。房。小。生。と。と。與。四。郎。犬。が。八。个。の。斑。毛。と。み。る。か。の。づ。う。因。縁。あり。を。か。う。
 加。梅。梅。子。小。八。行。の。文。字。見。し。も。亦。某。と。莊。助。と。外。小。六。個。
 の。豪。傑。あ。ら。す。其。の。相。似。る。玉。と。恙。と。具。足。を。つ。成。告。る。伏。姫。上。の。神。灵。を。と。神。

夏ゆそわろろめ現八房の犬を轉倒せり。房八沼菡の鮮血を流す。男女の
 血を流ぐとも難癒か。まて速小愈へ。又復血を盛。貝へ修験の法器
 あり。役行者の利生もあべ。左も右もよの夫婦。再生の思入。惜むべ。惜む
 べ。その刃犬の隊。その子。譲の故をり。世をさ。今ハ
 彼梅子。八ヶの文字。消失。八房の梅と房八夫妻と亦是名。淫自性乃
 義あり。核を夫婦。墓。伏。未。世。功。徳。を。標。た。れ。が。子。大。八。の。親。兵。衛。ハ
 骨。肉。の。弟。小。弟。一。後。年。里。見。殿。小。仕。ま。る。俱。小。戦。場。小。臨。ま。某。多。る。大。八。の
 子。と。資。敵。を。盡。功。を。讓。九。尚。其。の。戦。ハ。難。義。及。及。近。敵。を。殺。拂。以。或。前
 面。立。塞。下。其。の。死。代。今。宵。受。一。再。生。の。恩。小。八。兄。又。も。山。林。今。中
 と。傾。逝。の。送。憾。何。物。小。壁。之。悲。死。と。友。を。心。の。誠。二。鞋。の。隔。なき
 胸。を。ち。わ。け。懐。囊。小。納。梅。の。核。を。撈。半。の。包。紙。を。推。披。え。房。八。少。視。

け。この梅の核の後小件の夫婦が墓の時れより芽を生。八株の弱木年を
 歴。その実八房小生。八里入。小件の梅を房八の梅と稱。又八房の梅と稱。前治
 休題。房八大。信乃が誠心の飲。小苦惱を刃心。梅の核を。房八
 入。膝折起。叶賢。小犬塚。博愛言下。頭。某。過。世。あ。く。
 犬士。金碗。殿の子息。小。大道徳。小。邂逅。祖。父。が
 罪。を。宥。ら。ま。い。と。う。ぐ。年。來。の。夙。願。成。就。せ。の。と。る。を。齡。甫。て。四。歳。る。大。八
 の。真。平。ハ。親。小。代。の。義。を。取。親。兵。衛。と。字。せ。仁。と。名。つ。け。ら。る。意。外。乃
 大。幸。今。般。の。飲。び。の。飲。亦。小。の。小。か。も。子。ハ。犬。士。乃。且。其。の。小。父。ハ
 犬。田。小。後。見。せ。犬。塚。師。と。頼。此。彼。の。愛。願。小。二。親
 有。何。ぞ。憂。人。小。面。影。の。怪。小。犬。塚。小。似。も。是。小。の。因。果。わ。れ。が
 加。以。某。丈。婦。も。玉。小。象。る。八。房。の。実。生。の。梅。の。墳。墓。の。標。と。も。せ。と。る。

是日員外の犬士いんざいのけんしの犬けんの望足のぞみの谷やの向むかの犬けんの惜おしむ別わかを促うながし負おふ。
 時ときの鶏けいの声こゑ立たて天あまへ明あるをを乱みだる鳴なく房ふさ八耳はつみみを傾かたむく。や鶏けい明あるを東あづまを
 ちりまんとちりまんと時とき後ごをを死しも遂つひに空あや事ことをを阿あ舅きうのを錯さくのをむ
 多くと焦こ燥さうぬを小こ文ぶん吾ごへ今いま更さらに推おし辞じべを死しるをむをもも猛まう死し覚かく期きのをむ
 足あしも進すすまもも卷まもも撓たふもも心こゝろををちりちり。當下このとき延の由ゆ崎さき照てい文ぶんへ房ふさ八はち小せう文ぶん五ご五ごは
 うち對むかひと人ひとくよよ言ことを聽きけ促うながさとも惜おしむとも生せい死しも天てん理り自じ然ぜんふふも亦また
 直ちかくも汗あせ馬ば小せう鞭べんもも姫ひめ人ひとを追お追おなり。彼かの山さん河がのを瀨せととここととささんととささるを後ご人ひと馬ば
 俱ともに推おし流りゅうささまま其その知ち命めいと損しんへをも。ちりちり某このとき此このとき度このとき君きみ命めいを稟りやうなり大たい約やく閑かんの
 八はち州しゅうは賢けん良りやう武ぶ勇ゆうの馬ば侏しゆを募もんと欲ほつする程ほどは、大たい法ぽう師し小せう環わん會かいの引ひ接せつ小せう依い
 小せうの伏ふく姫ひめ上じやうのちち子こ小せう答たえ九く大たい士し小せう相さう見けんの賢けんを招まねくの本ほん意い小せう稱しやうへをささへ

山林さんりん房ふさ八はち郎らうへの義ぎその勇ゆう犬けん士し小せう坊ぼうとど非ひ命めいめと今いま終しゆうるとも宜よろ里り見けんの家け臣しんと
 べい。君きみ公こうの徵めい書しよのを小せうああ拜まが受うへと夜や堂だうに就つぶその子こ親おや兵へい衛ゑい幼ごう少せうとも
 君きみ臣しん二世にせの恩おん義ぎ深しんくも身み後ごの栄えい子こ孫そんの為ため小せうも亦またやと薦せん揚やうのをころを
 速すみく小せう四し方ほうある一通いつとうを取とりああぐ。房ふさ八はち郎らう額がく小せう賢けんとせ又また小せう文ぶん吾ごををんんとと大たい田てん生せい
 この意いををゆるゆる欽きん房ふさ八はち郎らうへのりりと里り見けん殿でんの家け臣しんとともその為ため必かならず死し乃なり
 深しん瘡そうを負おぬぬも忠ちゆう勤きん小せう餘よ日にちも只ただその僚れう友ゆう犬けん塚さか信しん乃なりが厄やく小せう代だいり死しを救すくる。
 主しゆ君きみの為ためゆゆと等とし。是こゝろ莫な大たいの忠ちゆうあり義ぎを救すくひひる死し深しん瘡そうと知しる。いいまいまままででう
 苦く痛いたををせんせん分ぶん錯さくも亦また惻さく隱いんとと將しやう大たいと武ぶ士し魂こん小せう文ぶん吾ご有あ理りととひひくくと。腋わき
 刀たう引ひ提てい身みを起たせ房ふさ八はち亮りやうとちち咲さく鄙へい言げんよよのを人ひとの武ぶ士し世せいに唯ただる。蜚ひ崎さき
 ぬ。意い謝しゃする小せう餘よああと。阿あ舅きうのを賤せんした船ふね長ちやうの子こ小せう生せいととも幸さいああと武ぶ門もん小せう入いく
 その死しををゆるゆると。阿あ舅きうのを刀たうをを勞らうせんせんのを分ぶん錯さくとと堂だうをを合あへへ項かうをを伸のべべる。

あろぬら。と小文吾が抜側めさる刃の光りふ吐嗟とさる母妙真の身を辟かよう
え。堪え胸へ板久の潮けり。よせく砕けてさるるも消くゆきととめる。涙の
出水海ふ入ふ瀬ゆる亀の浮木ゆも復あひさる別つる声を立てと唾痛る
袖の共は腸の断るむらも天沈む信乃も有撃ぬ哀戚の胸を痛めさるち
まのきく、大法師の房八がほり近く對ひ立ち。経誦被つ偈を示し。あづらふ
授る念佛の数ハ十声と八声の鶏の音雌へ鳴ねども母の哭く。あごほのくさ
心の暗を照もともさる振揚る刃の見も東天紅雞峙あさるの羽搏死と
共み閃めく大刃音へ無常迅速夢欬とさる。覚る死天の山林惜や抄の獨
花のちり際清さ最期え妙真のあひさる。かづべとあひさる。あひさる堪で伏
沈る声ふり絞と啼哭へ膝を枕し再寐せ。稚児の敬馬覺く。そのう鳥乱こ
足えすら父さよま喃と立ちまふ小文吾へ遠く血刀鞋小納めり。その亡骸と見

せどとく房八がゆてすま。信乃が血著の麻衣さるち披れてさるち被たる。さも
あろぬらや稚児を訝しげふ又足えり。奶々さるるさるのまを軟このまを独
臥る。祖母さまのむらさふ。した物果あさるて賺と遊りあさる。その替小吾侪
ぬ。乳汁賜てんと死顔をさる。眼を細小さる。母を懐へ入るとはれ妙真のよ
堪る。慌忙き稚児を。かさる引を抱縮し理うさる。大八よ縦百年の足
て。参るへのぬら。奶々もゆ起下。慕るるかゆきるをさるのひさる。随小が因月を
張や列衣んとうち歎く夏愛ぬ洩ぬ袖の露皆も滅又死頭を低く。慰めく秘傳
慨然さる。浩知ぬ外面俄頃ハ騒しく。投らるる音叫ぶ声檐下近くゆえ。衣袋皆
齊一敬馬立る。中は小文吾のちさる。土間ハ飛下り。樞戸を卒と開く。見る間
あそむを外面より。撞と投入む人礫。その人框の頭を撲くと。腦黄垂て死さる。
人々の驚るる信乃の身を紙燭と。小文吾よ足さるる死さるる別人

現八勇力
 三間者を
 塵小す



照文

小文吾

刃四郎

八八傳四車卷四

九一
〇山青堂藏



天飼現八

孟六

均太

八八傳四車卷四

〇山青堂藏

ろもど是則甲夜ぬまの塩漬の鹹四郎と訝る程もる。敵を左右に
 扱き。衝と内ぬ入るりのあむ。こんま大飼現八。拉れらる間者ハ是鹹四郎等
 類る。牛根五六と板板均太ちり。大力小締著らる。目とそとふ舌と吐き
 阿苦し息吐ぬ。當下信乃ハ立かたき。相戸を盧ハ。現八ハ西敵と一度小
 控と投累ね。膝小引布れ動せむ。小文吾信乃ハ又對つゆ。某最志
 婆浦へ赴た。破傷風の薬を求め。小彼薬店ハゆる年鎌倉へ移住し。
 今ハ彼知ぬやとのア。忽地王を失ら。惘然とつちあひ中。まより又鎌倉へ
 のいふつちを急ぐとも。けふ翌日。還り。大塚生ハ大病。日と往返。日を
 過ぎ。や薬を購得るとも。輒射の窮を救ふ不足。立かたき。大田
 親子小。成吉と相譚。なほせんまのさる。と吐裏小尋思。そまふ
 取らぬ。且くも途小憩。只音息ぬ。程ハ丑三の比及。門までかき

暑く。裡面ゆり。人々の声。ささる。訝し。けふ。伏を。入る。つち
 定め。後ゆ。と。あひ。彼知。小立。在。わ。の。翁。不慮。の。窮。山。林。夫。婦
 この子。の。犬。塚。生。を。幸。ひ。小。難。瘡。早。小。愈。る。大。道。徳。と。蚤。崎。ぬ。の
 う。さ。大。さ。ゆ。と。哀。し。く。潰。さ。る。月。ハ。あ。ら。つ。る。進。ま。ん
 と。又。山。中。山。林。ハ。深。瘡。を。負。ぬ。その。妻。ハ。と。絶。る。犬。塚。不。思。幾。よ
 平。愈。ら。る。今。圓。坐。小。著。り。と。も。死。と。人。の。生。る。小。あ。は。は。は。り
 何。と。い。ふ。と。あ。ま。天。の。明。る。ま。る。と。外。を。防。ぐ。小。ま。ま。と
 ろ。の。い。ふ。と。多。ひ。け。し。駒。繫。ぐ。袖。垣。小。身。を。よ。せ。て。音。も。せ。ず。時。を。寝。せ。が
 果。し。く。二。個。の。癖。者。小。庇。間。を。穿。く。篁。子。の。下。小。身。を。潜。し。緯。と。な。り。と
 ち。て。蚊。刺。さ。る。尻。を。搔。け。蟬。網。か。さ。る。面。を。拵。入。齊。一。庇。間。上。り。蝦。蟄
 の。如。く。小。跋。也。檐。下。近。く。立。聚。合。彼。罪。人。信。乃。が。を。汝。も。や。飲。れ。怒。り。

とて壯官許訪く甲夜の怨を復さべく賞錢の心願つべしとて走れと密
 語を歩を竊く共侶ふまんとする後より某矢庭に跳鬼く一賊が行上撞
 廻り引戻しと悴胡せが残る心賊に駭怒り打んと巻を閃き下を拂く
 筋斗らせ起んぐと初の一賊を又撞廻り裡面へ投入するはあやまふ
 組んとせし兩賊を左右小挟き一人も漏さむかしの如しと辞せり告るを
 小文吾やうく多く訪びこの三個の癖者の名を云々と喚ぶ妻もるく子も
 らぬ奴原へは相撲を好めども心ようぬめの共るは近属のせはけりし
 甲夜小此奴ホ推蒐来く云々のるのあやうくその怨を以てせん為致再び
 つれけん縛るはあまの危りれ和殿彼奴小微りせば遂に大事を恨てん
 密議を交する奴原られ命の既ある虫の火虫のこまう死に就くの息緒絶
 しと禍の根を断るべくといふ現八の兩敵を膝引著壓へ俣小項骨屈と

廻折げがさむとむらむ小叫びも果む諸声脆く目鼻より血を流し死にけりか
 現八も孟六均太鹹四郎ホが死骸を片隅に推累と物もち被りて挿ひて
 信乃の病著速に本復の訪びを速く小文吾が苦心を勞ひ引まて大照文
 らも對面し且妙真を慰め山林夫婦が義死を嘆賞しその子大八の親兵
 衛が犬を飼ふを祝しける當下小文吾の現八のあやう犬飼生の外に立て縛
 の顛末をゆりといふ今さうさうと生るも要る既小を天の明ぬらん小
 猶豫せ彼帆大夫未懸兵をむく必すべし縦質首をり欺死はるるとも
 さるよりの小不便に言ふ言及を齎し壯官許疑死て親を救ふか
 本てん門を出まがより見ゆる橋のほとり懸る小家の釣舟あり水陸とも
 警固の夥兵未釋まをを見定めり房八沼菡が亡骸のさる人々を舟に乗
 しと潜中り市川ある山林が宿所ま退た和殿の前もまの地小来りて

大々々案内なるべし。因くもさくうち任まのろる多くと密山落ハ現ハゆるち点
 頭。その事ハ心の中と大塚生と相譚。そのかきもさく天ハ既ハ明ハれも猶も
 かり暗る。今朝めく霧立。めく。咫尺の間も別。さき鳥の声。せせさる
 る。巳の比及る。さき。この霧決。霧。皇天后土吾黨を祐。さき。め
 る。あさき。よ。さき。縁の妨。さき。當下。大ハ照文。さき。既ハ
 四士。あ。御旋。さき。あ。照文。さき。信乃。現ハ小文吾。に
 うち。演説。さき。あ。大。ね。里見。由緒。あ。黒印。を
 受納。主従の義を固。さき。相伴。安房。あ。ん。美。勿。論。さき。と。さ
 え。と。徵書。人別。さき。信乃。權。特受。さき。照文。返。さき。の
 の。某。幸。い。尊。藩。宿。縁。あり。壁。後。小。將。軍。ま。官。領。ま。徵。さき。め。あ。い
 とも他。禄。受。さき。め。あ。い。さき。今。俺。們。五。人。の。外。又。三。大。士。あ。い。さき。

その人ハ遭さるその三士のありや。や。目今定ふ。いさ。額藏の。既ハ
 同列の。大士。彼人。いさ。この。席。さき。彼。大。川。莊。助。ハ。故。伊。豆。の。北。條。の。莊。官
 あり。大。川。衛。二。獨。子。え。その。母親。ハ。蛭。崎。の。先。考。と。ゆ。え。さき。十。郎。の。後。弟。え。さ
 寛正六年の秋九月。その父。衛。二。横。死。し。妻子。ハ。追。放。せ。さき。け。り。この。年。莊。助。六。七
 歳。乳。名。を。莊。之。助。と。い。り。母親。ハ。幸。く。稚。兒。を。携。り。往。方。ハ。水。長。鳥。安。房。ハ
 親族。ハ。蛭。崎。の。其。知。り。と。さき。心。あ。て。さき。その。冬。の。比。さき。武。藏。ま。さき。大。塚
 の。里。あり。母親。俄。頃。ハ。力。よ。う。ね。是。の。莊。之。助。ハ。土地。の。莊。官。墓。六。が。小。願。ハ。け。り
 れ。額。藏。と。名。つ。け。り。今。も。さき。彼。家。ハ。身。ハ。村。落。ハ。成。長。れ。武。藝。を。嗜。て
 謀。慮。あり。考。め。且。信義。を。重。む。實。ハ。さき。の。豪。傑。ハ。餘。人。ハ。さき。其。未。也
 彼。莊。助。と。俱。さき。官。途。ハ。進。ま。不。義。ハ。思。意。の。趣。か。の。如。し。賢。察。せ。れ。バ
 某。ハ。と。推。辞。ハ。小。文。吾。現。ハ。も。辞。齊。一。亦。ハ。さき。某。未。ハ。願。ハ。所。ハ。大。塚。と。相

同に一圓大塚の里小敷を彼に助ふ對面し。その事の越を告む大塚のそ
るまんや某も本意ふらなり。いつて且く武者修行し。かく武術を煇煉ま
べく里見殿のおん為小敵國の案内とこの強弱を窺知ふ後小賢とるをわらん
さし又この五人の外に大士あるが値ざと輕げ死を八士全く取りて安房へ
歸るとも遅延小あやう。その徵書その日よで和殿預り多ひねと志を述し。か
照文ゆきく嘆賞し。三士の辞讓寔小賢なり。郷小某其木崎より大田生の大忍
の九るるぬ感佩し。世小大勇士あやうのふともよまふまきとのあうとあり。あ
かく又あよあよ大塚生の信義博愛大飼生の遠慮勇力のつとを兄とせん
孰ち弟とせん俱小世の豪傑又彼大川莊助ハ伊豆の北條の莊官ありし
衛二が子るる某と再後兄弟ありのえ大川衛二ハ横死し。その家絶えり。と
某近属北條を過り一日里人よ傳ふといとうましく心ひさふその子ハ今も

美心も大士の一人あやうける欽幸ひ甚。北條ハ父の故郷ありしゆりのそ
遠くもあやぬ類族のうま年未失ふ疎隔あり。その家の断絶を今茲にめく傳
す。戦國の習俗是非及むとそとまきかかもあよ三士の辞讓も証し。そらん
少某も俱小大塚の里よ赴死に助ふ對面し。徵書を授くべし欽貴僧の意
見はまき。と問ひ、大をん之も、大ハ要時沈吟し武藏會大塚の管
領扇谷麾下の軍將大石兵衛尉が城墾あり。尚額藏の莊助ハ云云の勇
士とるる里見より募らう。とのあよとや彼知へ洩らふ大石が陣番小莊助を
取籠と決しとあやるる處とべとまき。さあるるわぶ可惜し一犬士を喪ふあや
や貧道ハ行脚のりるる彼知へいれ。莊助ハ對面し。命を傳ふし。そ
人の疑ひるる。あやあれども壘崎生し。まき四犬士を識る。その一人ごも
俱甘ん安房へかく何を畏何を徵ふ及命とまき。かれハ大江親兵衛と

その祖母妙真を俱ぐ一ひと親兵衛おんべゑ既い不安房あふらふ亦また自餘よりのの犬士けんしを招まねむ。
 竟つひ小參聚こさんく之の。貧道ひんどうも下くだが改郷かいかう遷うつりて。君きみの見糸けんいと入いる願ねがひ。
 うぬ又またあらねども。むり失うちる八顆やつぱの玉たま。今いま全ぜんく取とりてをいかにせんか。
 満願まんげんの時とき至いたる日ひ。小犬こいぬ七しち犬士けんしを伴ともひ。見糸けんいともくぬぐ。よまきその徴書めいしよの
 野僧やそう且かつく預あづかる。大塚おほづか大田おほの大飼おほのも且かつ市川いちがわも退ひれ。大塚おほづかの里さとに赴むかひ。
 竊ひそか又またの趣おもを社助しゃすけ小生こせい。そのめと貧道ひんどうの山林さんりん夫婦ふうふの為ため。小追こお薦せんの續つづ經けい
 去さる。後のち小彼こかれ知しへ邁まくべき。この茂しげ小後こごひ多おほう。といは照文ていぶん大おほ小教こけうび別べつ小四しよ通つう乃なり
 徴書めいしよをとうき。前まへの三さん通つうと共ともに。大おほ小速こすみとけ。當下たうげ妙真めうしんの。大照たうしやう文ぶんもか
 ほろり近ちかく親兵衛おんべゑを果はらう。さそひひける。かむりの稚兒ちゑをさかき安房あふらへ
 徴めする。の。小舟こふねひ小舟こふねも。二ふた犬士けんしと推辞おしげ。さうも小物こもの数かずる。ぬ親兵おんべゑ
 衛ゑひ。先まへさうさうぬる。死しや退ひくとも進まむとも人ひとと共とも侶りよと宣のたまひ。るん

情なさけの。今孫いまのまごをの。徴めいも。影護かげごくはうといひ。理ことりる。小文吾こぶんごも外ぐわい任にん乃なり
 為な小辞こしを添そへ。只ただ共侶ともりよと辞しひ。さう。さう。けい。とも。照文ていぶんへ。つ。許ゆるき。氣けさる。
 説諭せつごさんとき争あふを。大おほ小急こいそ推禁おしげんめ。今いま又またあれらの問答もんたう小時こときを。親おん要ようる。
 古ふる親兵衛おんべゑ小兒こゑといひ。亦また是こゝ犬士けんしの一人ひとり。則すなはち麟趾りんし龍孫りゆうそんえ。れ。他領たうりやうへ
 措おへ。今いまおて安房あふらへ邁まる。後のち小茂こもさう。小遅こお死し小あ。む。丈五ぢご兵べゑ
 衛ゑを還かへり。亦また外祖ぐわいその意見いけんもあ。死し伏ふく姫ひめの。おん数珠ずしゆハ役行者やくぎやうの通つう力りきの。
 授たまひ。め。あ。ん。これ。あ。や。姫ひめ。幼推おとづかを。時ときより。率ひれ。多おほう。その日ひに。行ぎやう者しや
 の示現しげんを。く。り。小顧ここ小目こめと十一郎じゆいちろうと大田おほの山林さんりんが甲乙かういつを。試こころん。と。修験しゆげん者しや小
 打扮うちばんこの地ち小才こさい。も。四しよ犬士けんしを相識さうしきする。の。是こゝも亦また役行者やくぎやうの利益りやくを。あ。
 親兵衛おんべゑが進退しんたいも亦またおの。便宜べんぎあ。朝あ霧きりあ。立たて。あ。今いまの。時とき
 親おん小文吾こぶんごの謀まう。小使こし。小官こくわん許ゆるさる。と。使つかせ。阿あと。信しん乃なりが血ち著つの麻あ

衣の両袖きぬのりょうそでは羅離らにと衣きぬよりより房ふさが首くびを引ひきりりてて包つつめめどもども又また哭なく
 妙真みょうしんの色いろもも袖そでの雨霽あめあはれ間まに絶とちち入いれれ被かけけるる後のちの片身かたみ衣きぬこれこれややこの世よの別わか
 ぞぞ知しららずずもも暮あるる稚見ちみのの小父こぢいさまさま何いれれへへ邁まるる吾われ侘ぢもも俱ともめめとと黄縁わうえんをを信しん乃のハハ賺ず
 引ひ放なすす糸いとのののの苦くるししめめとと歎なげかかるる煩悩ぼんごうのの犬飼いぬかひはは目めををわわりりやや齊いっ悲ひ歎たん
 ちちりりけるるかかとと小文吾こぶんごのの腋わき刀や合あひひ腰こし小躰こたゝ首級くびぎをを右みぎのの小極こごくゆゆとと大照だいしやう文ぶん小別せつをを
 告つ信しん乃の現げん八はちのの後のちのの鹹かん四し郎らうがが死しにに入い江えのの淵ふちへへとと密ひそ中なかにに謀まりりとと妙真みょうしん我われ
 慰なぐさめめりり又また將まさ大だいのの親おや兵衛べゑがが王わうののささ又また小堪こかんぬぬ歎なげかかるる懶惰らんたとと失ありりのの心こころををつつけけとと
 才さい之し起おききとと霎しやく時とき目め送おくるるのの入いをを立たちちとと迹あと小横こよこににたたれれ夫婦ふふのの亡な骸がいののままハハ舊ふるのの
 俣ひるるとと軀みとと首くびのの死別しべつとと歎なげかかるる雲霧うんごとと眞愛まゐ也や霑ぬれれ小胸こむねもも曇くもりり尚なほ暗くられれ門かどのの戸とをを卒すまとと
 推おししめめりり翅つばさををれれ鳥とり自物じぶつ朝あ立た遠とほくく出いけけりり

里見八犬傳第四輯卷之四 終



